

全国外大連合による通訳ボランティア育成支援の取組みと
教育的効果に関する考察

～平昌冬季五輪・パラリンピックのボランティア活動に参加した
学生を事例として～

澁谷由紀・朴ジョンヨン
(神田外語大学)

Educational Outcomes of the Interpreter Volunteer Training Seminars
Provided by the Consortium of Foreign Studies in Japan:

A case study of undergraduate volunteers who participated in the Pyeongchang
Winter Olympics and Paralympics

Yuki Shibuya・Jeong Yong Park
(Kanda University of International Studies)

はじめに

近年、日本のボランティア活動はグローバルな環境のもとで行われることが多くなっている。これは実際に海外に出て行う、例えば、自然災害による被災者への緊急支援、開発途上国での中長期的な支援などの活動に限定されるものではない。日本で開催される国際的なイベントや会議などの運営、あるいは、日本国内の地域社会で生活する多くの外国人に対する支援活動においても、多様な文化・宗教的な背景を理解した多言語ボランティアが必要とされている。

スポーツ界でもグローバル化の波は必然であり、2019年のラグビーワールドカップ 2019™や東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を経て、2021年の関西マスターズゲームズと、日本において国際スポーツ大会

の歴史的局面を迎えている。これらの国際大会の円滑な運営のためにも、外国人選手や関係者のニーズに対応できる多言語ボランティアの存在は欠かせない。

スポーツ庁（2018）は、東京 2020 オリンピック・パラリンピックのスポーツ・ボランティアの募集に際し、「学生が、大学等での学修成果等を生かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の社会への円滑な移行促進の観点から意義があるもの」とし、2020 年東京大会に合わせて学事暦等の変更を各大学等に提案した。大学生にとって、スポーツ・ボランティア活動への参加経験は、身につけた言語や異文化の知識を実践する機会という教育的な意義があり、実社会の中でボランティア活動を経験することが将来の職業生活においても有益であることが示されている。

実際に、日常的に外国語が使える環境にない外国語専攻の学生たちにとって、責任を伴う形で外国語を使う体験は、より高度な言語能力修得への大きな動機付けや学習意欲の向上につながっており（朴, 2011）、学生の卒業後のキャリア選択にも影響を与えると推察される。

神田外語大学では、2007年9月から、学生の外国語修得への支援や言語運用の経験など、語学学習意欲の向上に向けた取り組みを推進してきた。以来、2019年10月まで150回に及ぶ国際大会（オリンピック・パラリンピックやワールドカップ、世界選手権大会等）に、英語を中心に学生の専攻言語を含めた多言語対応ができるボランティア1,301名を送り出してきた。

本稿は、全国外大連合における通訳ボランティア育成支援やその実践取り組みを紹介し、その成果を報告することを目的とする。学生によるボランティア活動は、一般に、その活動が「現地や当事者への貢献」と「参加した学生にとっての意味と意義」という2つの軸から評価される（兵藤, 2019）が、本稿では、大学としてより良い知識実践の場を学生に提供する教育的手法の改善を目指すことを重視し、全国外大連合による通訳ボランティア育成セミナーとその実践である平昌冬季五輪・パラリンピックの通訳ボランティア活動に参加した学生にとっての活動の意味・意義と教育的効果に焦点を当てる。

1. 全国外大連合の設立

東京オリンピック・パラリンピック大会の開催が決まった翌年の2014年6月、日本にある7つの外国語大学¹により21世紀のグローバル社会に相応しい人材育成のために、様々な連携を図ることを目的とした「全国外大連合憲章」が締結された。同年11月に京都で開催された「全国外大学長会議」において、神田外語大学は、グローバル人材育成を目的とした通訳ボランティアの育成事業を提案した。2007年から全学を挙げて積極的に取り組んできた本育成事業の教育的意義や効果、また外語大としての国際社会への貢献等を前提にした提案は承認され、2015年2月には神田外語大学ボランティアセンター内に、「全国外大連合通訳ボランティア支援事務局」が設置された。

2. 通訳ボランティア育成セミナーの開催²

全国外大連合憲章の理念を具現化する取組みとして、2015年8月には7外大連携による「第1回全国外大連携プログラム通訳ボランティア育成セミナー」が開催された。初めての試みということもあってか、240名の定員に対して、7外大から1000名を超える多くの学生からの応募があり、改めて学生ニーズの高さが窺えた。

以降、2018年9月まで6回にわたり全国7つの外国語大学の学生を対象とした全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーが開催された。受講生は、第1回から第6回までのセミナー修了後、多言語人材バンクに登録しており、卒業後にも国際スポーツ大会において随時情報が届くようになっている。

2回目以降のセミナー修了者は以下表-1の通りである。セミナーを修了した学生は「全国外大通訳ボランティア人材バンク」に登録することができ、その後希望する学生には、実践の場である各種スポーツ大会や国際イベン

¹ 関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、東京外国語大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学（五十音順）

² 筆者（朴ジョンヨン）は、第1回から第7回まで本セミナーの教育担当コーディネーターを務め、全国外大生のボランティア育成・実践活動を支援してきた。

トでのボランティア活動の機会が提供される。現在登録している学生は、1,965名の修了者に対して約86%の1,694名である。多くの受講生がセミナーで学んだ知識を実践する国際大会等におけるボランティア活動に対して高い意欲を示していることが分かる。

表-1. セミナー修了者・人材バンク登録者数推移

セミナー修了者・人材バンク登録者数推移（単位：人）								
回	1	2	3	4	5	6	7	計
修了者	236	197	367	178	356	424	207	1965
登録者	219	188	346	126	284	375	156	1694

3. 通訳ボランティア育成セミナーの内容

セミナーにおいては、それぞれのセミナーの目的に相応しい講演者を招き、大学の教育者や研究者のみならず、国やグローバル企業の関係者による特別講演も実施している。

平昌冬季五輪・パラリンピック競技大会前々年の第3回セミナーでは、平昌冬季五輪・パラリンピック競技大会組織委員会の金キホン副事務総長をお招きし、韓国で初開催となる冬季五輪大会の意義を語ってもらった。その際には、日本からのボランティア協力への感謝の言葉も伝えられ、参加した学生のボランティアに熱い期待が寄せられた。京都外国語大学で開催された第4回には、東京2020オリンピック・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長より、オリンピック・パラリンピックの日本社会に及ぼす影響についてご講演をいただいた。第5回には、橋本聖子現東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長から、自らの選手時代の経験を踏まえて国際大会におけるボランティアの重要性に関するご講演をいただいた。また、2019年8月に開催された第7回セミナーにおいては、鈴木大地（前）スポーツ庁長官より、金メダル獲得までの経緯やオリンピック・パラリンピックのレガシー等についてご講演をいただいた。

セミナーの内容は、スポーツや文化を中心に他大学の様々な専門分野の研究者とも連携を図り、幅広い分野の知識修得に及んでいる。また、実際に活躍されているプロの通訳による現場でのスキルなどがグループワークを通じて伝達され、語学を学ぶ学生たちにとって高い効果が期待されるプログラムとなっている。

4. ボランティア育成セミナー参加後の意識変化に関する調査

2007年から2017年まで神田外語大学から国際大会にボランティアとして参加した学生の参加動機と活動後の意識変化等の調査（朴、2011）をベースにし、2015年8月より2018年までの全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した延べ1,758名に対し、アンケート調査を行った結果を以下にまとめた。

1) 全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーの参加動機

図-1. 第1回～6回目まで全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した動機 (n=1,758)

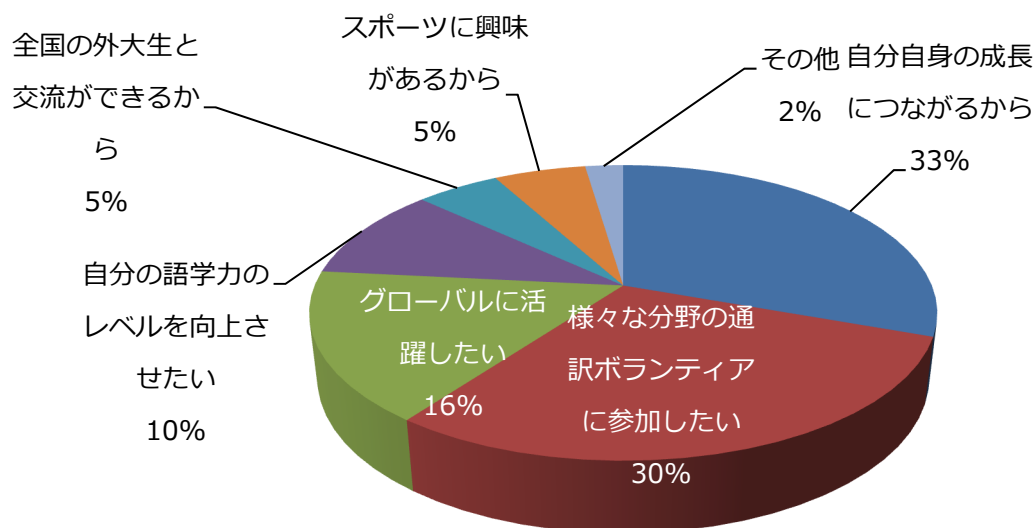


図-1は、このセミナーに参加した動機についての結果である。一番多いのは「自分自身の成長につながる」で33%である。学生たちは授業外の普段体験できない環境の下、自己成長と新たな自己発見をしたいと思ってい

ることがわかった。2 番目に多いのは「様々な分野の通訳ボランティアに参加したい」30%、次いで「グローバルに活躍したい」16%の順となっており、国際スポーツ大会に参加する外国人選手や大会運営に語学を介したボランティアとして関わりたい意欲が表われていることが理解できる。

2) 参加後の意識変化等について (n=1,758)

ここからはセミナーに参加した学生の意識の変化等について考察する。アンケートの結果、以下2)-1から2)-5のような意識変化があったことが挙げられた。

2)-1. グローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった

図-2 1,758 名からの回答結果

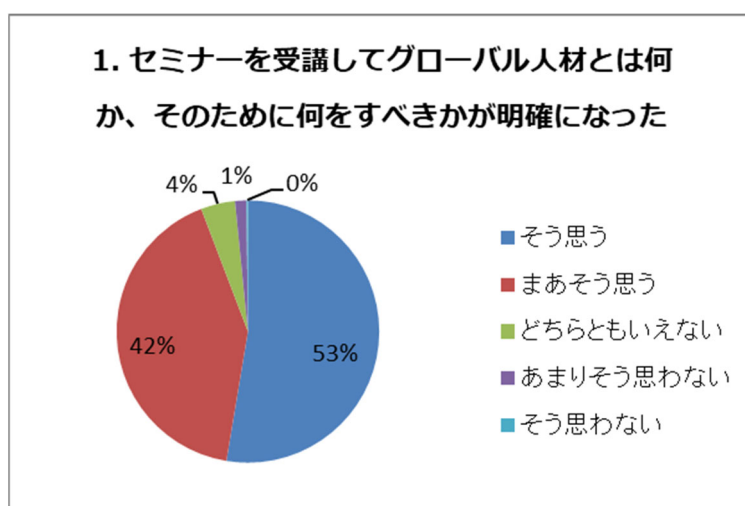
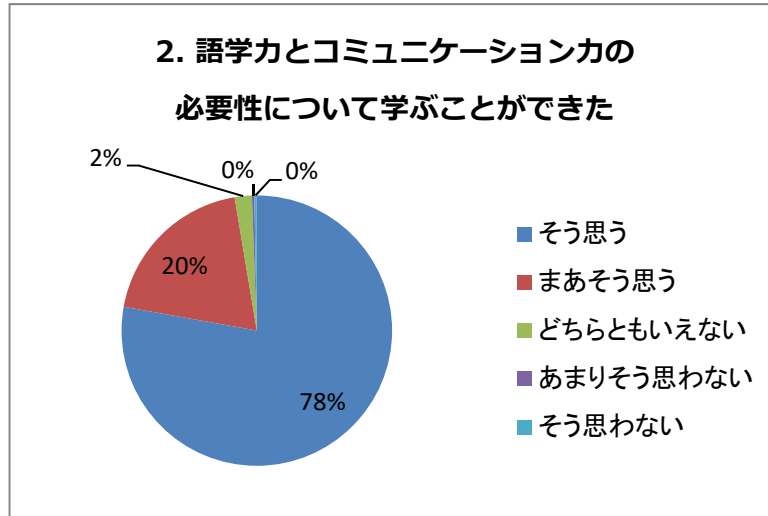


図-2の「グローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった」について、53%が「そう思う」と答えた。42%の「まあそう思う」という回答と合わせると、95%に及ぶ参加者たちが単に通訳ボランティアのスキルや技法を学ぶだけでなく、グローバルなマインドやグローバル人材になるための資質と条件等について理解を深めていることが明らかになった。

2)-2. 語学力とコミュニケーション力の必要性について学ぶことができた

図-3 1,758 名からの回答結果



次に、図-3の「語学力とコミュニケーション力の必要性について学ぶことができた」に対し、「そう思う」78%、「まあそう思う」が20%であった。グローバル人材になるための条件である語学力・コミュニケーション力の必要性を感じている受講生が98%を占めていることになり、外国語を学ぶ学生にとっては語学を学ぶ意義とコミュニケーション力の重要性を実感していたことが実証された。

2)-3. スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった

図-4 1,758 名からの回答結果

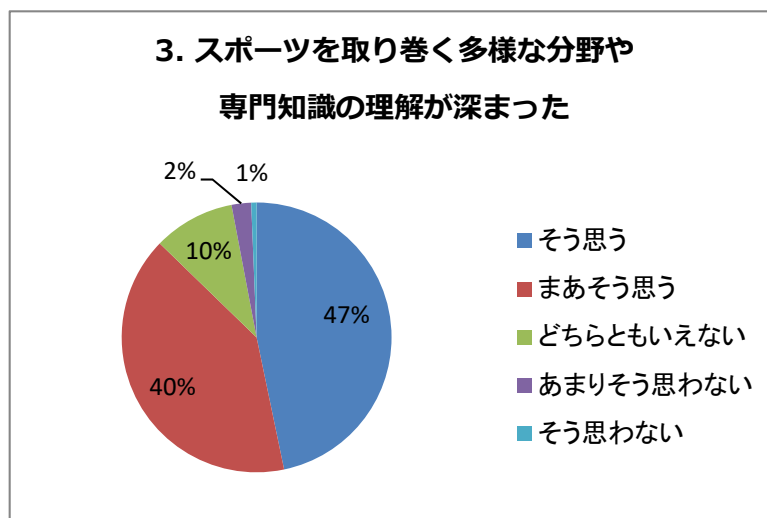


図-4の「スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった」に対する回答は、「そう思う」47%、「まあそう思う」40%で、合わせて87%「どちらともいえない」が10%を占めている。多くの参加学生が、このセミナーをスポーツ分野の専門知識を吸収できる場として捉えていることが推察できる。

2)-4. 参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった

図-5 1,758名からの回答結果

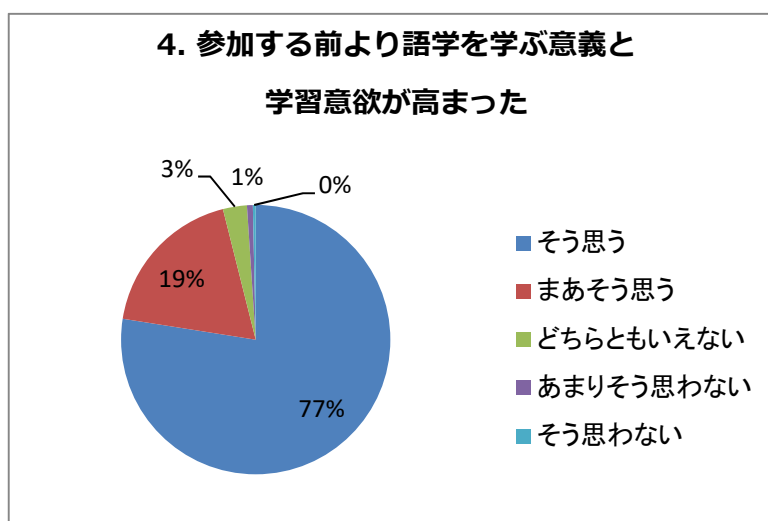


図-5の「参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった」に対し、「そう思う」77%、「まあそう思う」19%の順となっており、参加前と受講後の語学学習に対する意識の変化があったと感じた受講生が96%を占めている。この結果から、語学学習を主に目的とする外大生にとって、セミナーへの参加は、語学を学ぶ意義とさらなる学習へのモチベーション向上に役立つということが浮き彫りとなった。

2)-5. 今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい

図-6 1,758名からの回答結果

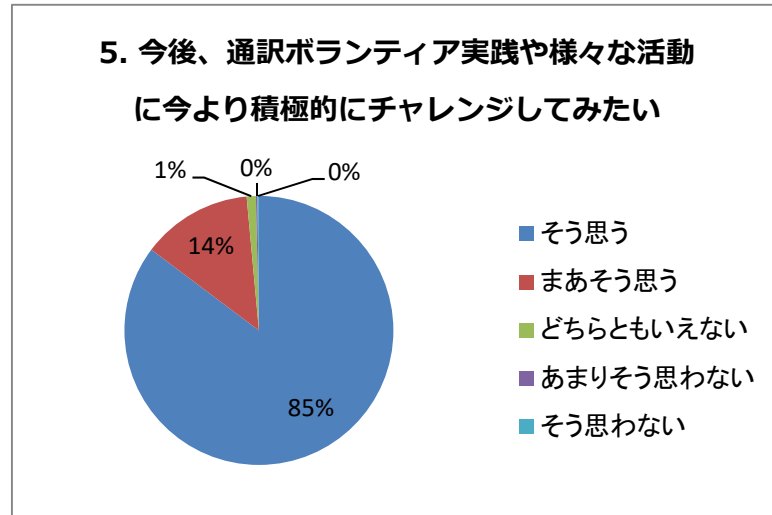


図-6の「今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい」に対しては、「そう思う」が85%、「まあそう思う」が14%を占めており、99%の受講者は座学のセミナーだけで満足せず次の通訳ボランティア実習に積極的にチャレンジする意識に変わったことが明らかになった。

5. 全国外大連携プログラム通訳ボランティア実践の取組み

全国外大連合は、通訳ボランティア支援事業の一環として、「全国外大連携プログラム通訳ボランティア育成セミナー」を受講した学生に対して、様々な国際大会におけるボランティア活動の実践機会を提供している。これまでの全国外大連合の学生ボランティア参加の実績としては、2016年10月に文部科学省が主催し、京都及び東京で開催された「スポーツ・文化・ワールドフォーラム」に39名、2017年2月の「札幌冬季アジア大会」に86名、また2018年2月には「平昌冬季五輪・パラリンピック競技大会」に100名の学生を送り出している。

2016年6月に、全国外大連合は通訳ボランティアを通じた連携を目的に、平昌冬季五輪・パラリンピック大会組織委員会と韓国ソウルにて協定を締

結した。2018年2月には、全国外大連合から平昌冬季五輪・パラリンピックに100名の学生がボランティアとして大会運営に携わった。参加した学生らは、26日間（2月1日～26日まで）ピョンチャン会場に34名、カンヌン会場に34名、チョンソン会場に32名と分かれて、英語を含む多言語グループとして活動を行った。活動の内容は、インフォメーションセンターや紛失物センターでの対応、観客案内、誘導、出入統制、関係者入口対応等広範囲にわたる活動であった。

6. 平昌冬季五輪・パラリンピックの通訳ボランティアに参加した学生への調査

本項では、2018年の平昌冬季五輪・パラリンピックに参加した学生に対するアンケート調査（n=67）の結果、さらに、その中から2名（表-2参照）に対して行った通訳ボランティア活動経験についての聞き取り調査（調査期間は2020年9～11月、各約1時間程度の半構造化面接）の結果から、通訳ボランティア活動への参加動機と参加経験に対する自己評価について考察する。

表-2 インタビュー調査対象者

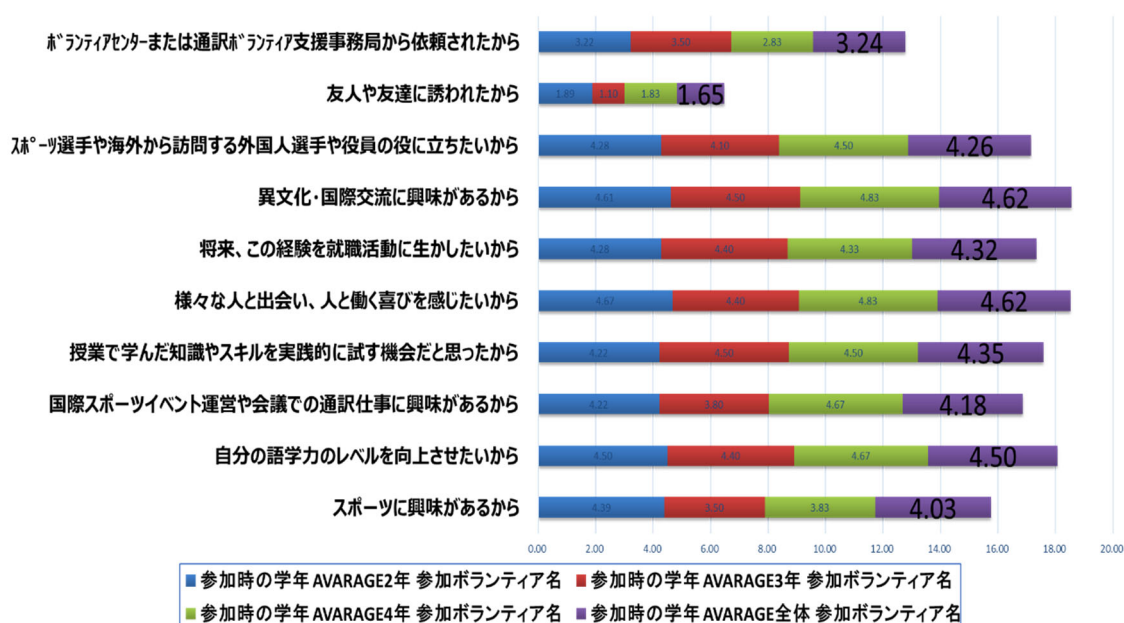
ID No.	専攻語・使用言語	調査時 学年	性別	ボランティア活動開始時期	おもなボランティア活動経験
I-1	英語	4年	男	小中学生の時から	地域イベント、平昌オリンピック
I-2	英語	4年	男	大学入学後	東京ゲームショー、修学旅行の同行通訳、平昌オリンピック

1) 平昌冬季五輪・パラリンピックの通訳ボランティア活動への参加動機

グラフ-1に、活動後に神田外語大生67名に対して行なったアンケート調査の結果を示した。平昌冬季五輪・パラリンピックへのボランティア活動参加動機について自己評価した平均値を学年別に示したものである（5段階評価：5＝「そう思う」、4＝「まあそう思う」、3＝「どちらとも言えない」、2＝「あまりそう思わない」、1＝「そう思わない」）。グラフの青色は2年生（32名）、赤色3年生（29名）、緑色が4年生（6名）を表しており、紫色は全体の平均値を表している。

グラフ-1から、平昌冬季五輪・パラリンピックのボランティア活動への参加動機は、「自分の語学力のレベルを向上させたい（4.50）」、「異文化・国際交流に興味がある（4.62）」、「様々な人と出会い、人と働く喜びを感じたいから（4.62）」、「授業で学んだ知識やスキルを実践的に試す機会だと思ったから（4.35）」などのように、多くが語学力の向上、興味関心を深める、人間関係の構築、学んだ知識の実践のためなどのような、自分のためになることを実現するための活動機会と考えていることがわかる。

グラフ-1. 平昌冬季五輪・パラリンピックに参加したボランティア参加動機 (n=67)



語学力を試す機会として通訳ボランティア活動を捉える傾向は、インタビュー調査から得た次のような発話からも窺える。

（ボランティア活動現場で英語を使うことが）うまくいったにしろ、うまくいかなかったにしろ、その成功体験、失敗体験が自分の英語学習にもつながると言うか、モチベーションが上がるので。単純に誰かの役に立ちたいなっていう思いも、まああるんですけど、そっちが先に来たというよりは、自分がもっと英語を

使いたってという思いが先に来て、その結果誰かの役に立てた、ああ嬉しいな
という感じでしたね。(I-2)

自分の能力・スキルの向上のためよりも、「スポーツが好き」という興
味関心から、オリンピックという特別なスポーツ・イベント自体を「熱を
肌で感じる」ことができる貴重な経験と捉えて参加を決めたケースもある。

僕、ウインタースポーツもやるので、転がり込んできたチャンスだったので、
行きたいなと……目の前で見れるかもしれないし、いざ世界レベルのプレーと
かも見てみたいなっていうので……スノーボードをやるので、平野くん、目の
前で見れたらうれしいなって……通ったらラッキーっていう気持ちで応募しま
した……ああいう世界的なスポーツの祭典っていうものに初めて肌で感じたの
は大きかったですね。スケールが違う。スポーツ大好きなので、後々スポーツ
の仕事に就きたいって、そこで思ったんですよ。だから、それはいろいろお客
さんの層であったりとか、あと、何だろうな。でも、熱かな、お客さんの。お
客さんの熱を生で感じられたのは一つ大きな衝撃を受けたかな。(I-1)

大学生のボランティア活動への参加動機にかかわる調査研究では、ボラ
ンティア活動への参加は、伝統的な公益性、奉仕性、献身といったような
利他的な動機からではなく、身近な興味ある活動を通して経験や視野を広
めたいという自己実現の動機から活動に参加していることが指摘されてい
る(e.g., 迫・上地・山本 1997; 柴田・大東・大山ほか 2004)。本稿の調査
対象者の回答からも、外国語専攻の大学生として当然と考えられる語学学
習の成果を試すという自己実現的な理由がおもな参加動機であることがわ
かった。外国語専攻の学生にとって通訳ボランティア活動は、自身の語学
力を確認する機会であり、向上させるチャンスであり、自分のための学び
であると受け止められているということである。

さらに、学生にとって五輪でのボランティア活動は、好きなスポーツ・
イベントに当事者として参加でき、異文化環境で世界中から来たさまざま

な人々にふれ、そのような経験が自分の興味関心の延長上にある「一つの楽しみ」と捉えられているのが特徴であろう。

2) 参加経験による自己成長の認識

グラフ-2は、平昌冬季五輪・パラリンピックでのボランティア活動参加経験を項目ごとに自己評価した平均値を学年別に示したものである（5段階評価：5＝「そう思う」、4＝「まあそう思う」、3＝「どちらとも言えない」、2＝「あまりそう思わない」、1＝「そう思わない」）。グラフの青色は2年生（32名）、赤色3年生（29名）、緑色が4年生（6名）を表しており、紫色は全体の平均値を表している。

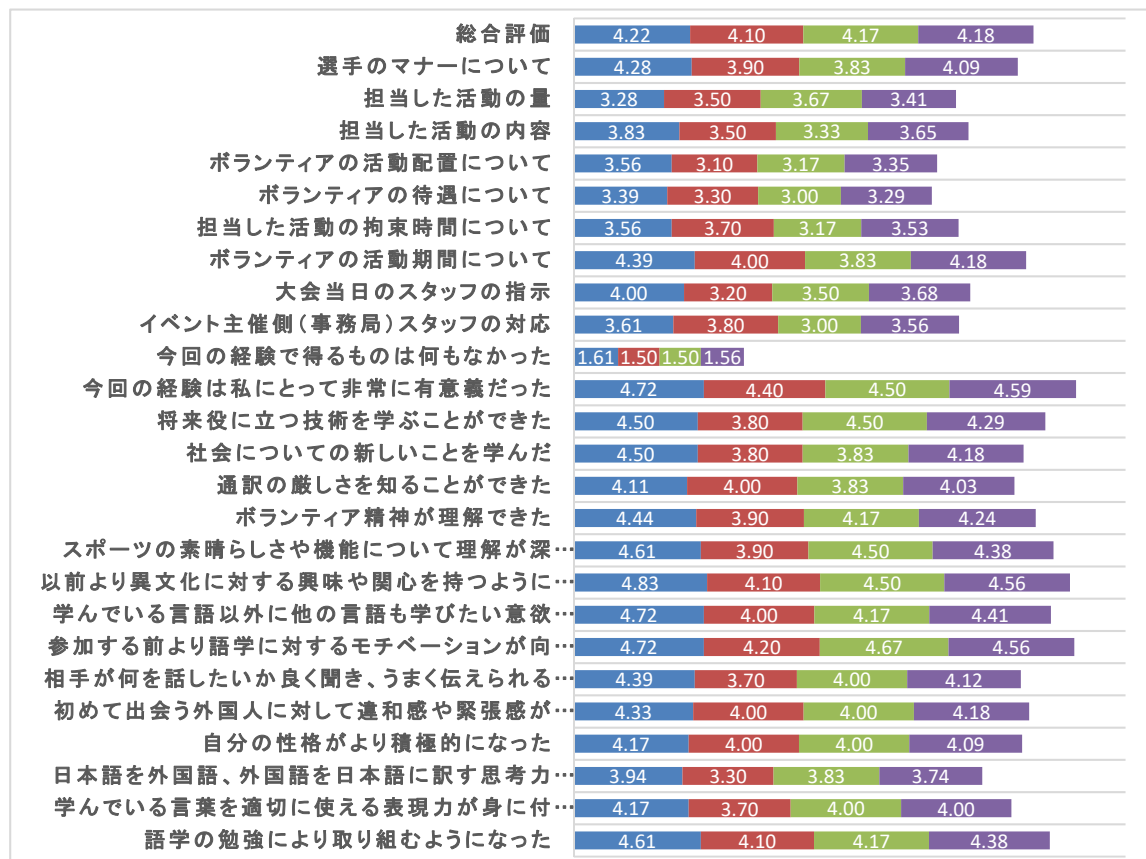
平均点として、一番高く示されているのは、「今回の経験は私にとって非常に有意義だった（4.59）」で、活動が充実していたことが窺える。次に、多く示されたのは、「以前より、異文化に対する興味や関心を持つようになった（4.56）」、「参加する前より語学に対するモチベーションが向上した（4.56）」、それぞれ同じ平均点が示され、事前学習から得られた学習効果に関連づけられる回答が多く見受けられる。

学年別の回答傾向に大きな差は見られなかったが、現場でしか体得できない貴重な活動であることも窺えた。「初めて出会う外国人に対して違和感や緊張感がなくなった（4.18）」、「自分の性格がより積極的になった（4.09）」、「ボランティア精神が理解できた（4.24）」、「相手が何を話したいか良く聞き、うまく伝えられるようになった（4.12）」、「将来役に立つ技術を学ぶことができた（4.29）」などの項目の平均値が全体的に高い傾向が見られた。

参加した学生のアンケート調査の自由回答欄からは、「海外にいるときは海外のルールや言語を積極的に取り入れ、いかに自分のものにするか、ということが大事になってくる。その国のことを知り、言語を使ってコミュニケーションを取っていく中で、ボランティアをする意義を見つけることができた。」、「言語が通じない時にボディーランゲージや表情がとても大切だと痛感した。英語通訳で参加したが、韓国語もある程度勉強していけばもっとコミュニケーションがスムーズだったと思うので、次にこう

いった機会があればその国の言語を学んでいきたい。」、「英語のネイティブの方々はやはり話すスピードが早く聞き取れないことが何度かあり、まだまだ、英語力が足りないと感じることが出来た。このボランティアを通じて、人との繋がりを感じることができ、それを通じてもっと言語を学びたいという気持ちが湧いてきた。」などの感想が寄せられ、参加した学生たちにとって充実した経験であったことが窺える。他者と協調性を保ちながら働くことの大切さと喜びを体得し、専攻言語習得や異文化理解への大きな動機付け、及び日本人としてのアイデンティティ等、グローバル人材に求められる様々な視点を身につけていることが確認できた。

グラフ-2. 平昌冬季五輪・パラリンピックに参加したボランティアの自己評価 (n=67)



一方で、ボランティア活動は、楽しいことばかりでなく、辛かったり、戸惑ったり、悩んだりする場面も勿論ある。インタビュー対象の学生からは、自発的に参加した通訳ボランティア活動であっても、「朝の、多分4時半とかで結構マイナスだったんですけど、寒い中 30分とか待たされたりと

か。(I-1)」のような経験についての発話があった。また、思い描いていた「通訳ボランティア」のイメージと異なり、「英語が使える」という期待と現実とのギャップに戸惑うこともあるだろう。実際には、外国語より日本語を使うことの方が多かったことや通訳とは別の役割を求められることもある。

正直そのギャップはありましたし、もっと（英語を）使いたくなって思いがあったんですけど。まあ、とはいえ韓国に、ぼく初海外だったんですけど、そこに4週間いる中で、その状況に文句を言っても何も始まらないので……どうやったらそういった機会をつくれるかなとか、その環境から学んだ部分もありましたし。韓国人のスタッフさんとか、ほかのボランティアとは基本英語で話してたので、英語を使う機会は毎日あったんですけど、単純にそれがお客さんに対してとか、オリンピックの一員として使う機会はなかった……ないものはないしな、みたいな。じゃあつくるしかないかな、っていう感じでした……いろんな人に声かけたりとか……やっぱり自分からチャンスがなかったら動かなきゃいけないんだとか、っていうのは学びましたね。チャンスがないからとかじゃなくて、チャンスはつくるものだっていうのとか……大学内で英語サークルに入るとか、大学の施設に行くとか、っていうことだけでは養えないことかなって思いました…… (I-2)

ボランティア活動を続ける中で、その場の状況を把握し、何が必要なのか、自分にどのような役割が求められているのかを認識し、自分の判断で機転をきかせて行動に移すということを学んだということであろう。以下のような発話もあった。

自分から考えて動くようにもなったり、柔軟に……最初に聞いてたことと、やったことが、まったく違ったりすると、自分で考えて、ここは自分でやって、ここは怪しいから大会の人に聞いたほうがいいなっていうのも、自分で考えてやらなきゃいけないし。(I-1)

ボランティア活動が学生の自己肯定感を高め、学習意欲に肯定的な影響を与えることは多くの研究調査で明らかにされている。河井（2012）は、ボランティア活動への参加と学生の学習との関係について、「大学生のキャリア意識調査」をもとに、ボランティア活動により多く参加している学生は、ボランティア活動で協働・チームワーク、困難や失敗との直面の機会、責任や役割分担の経験により、知識・技能をより多く身につけており、学習パフォーマンスが高いことを指摘している。本研究の結果からも、通訳ボランティア活動を経て、学生の行動や意識に変化が起これ、日常的な大学教育だけでは得ることができない、語学実践、コミュニケーション力や異文化理解力の向上、積極性が促されたことが推察される。

7. まとめと今後の展望

1) 調査結果のまとめと課題

スポーツの国際大会における通訳ボランティア活動は、若者のスポーツ分野への関心の高さから、チャレンジするボランティアとしては敷居が低いと考えられる。通訳ボランティア育成セミナーや平昌冬季五輪・パラリンピックのボランティア活動に参加した学生に対する調査結果から、学生にとってのボランティア活動は、従来のボランティア活動にある「奉仕」や「社会貢献」というイメージとは異なるものであることがわかった。外国語専攻の学生にとって、国際的なスポーツ・イベントで通訳ボランティア活動に参加する経験は、語学スキルを異文化環境で実践する場と捉えられている。さらに、実際に現地で活動する中で、多様な人々と出会い、話を聞いたり、話し合ったりする中で、異文化理解力やコミュニケーション力、積極性を身につける機会になっているようである。

スポーツ分野に限らず、若年層のボランティア活動への参加は広く浸透してきているが、ボランティア活動は支援する相手があって成り立つ活動である。自己志向的な参加動機が顕著であっても、アンケート調査の「スポーツ選手や海外から訪問する外国人選手や役員の役に立ちたい」という項目に対して、多くの学生の回答は肯定的であった（グラフ-1参照、全体の平均値は4.26）。「スポーツ・イベントにかかわるさまざまな人々を支えた

い」というような、一般的なボランティアの理念に内包される利他性があることが窺える。今回の調査では、ボランティア活動後の自己評価、つまり、「する側＝自分」に焦点を当てたが、今後の調査課題としては、ボランティア活動本来の意義である「現場や当事者にとってどのように良いものであったのか」という「される側への貢献」（二宮, 2017）という視点からも活動を評価する必要があると考えられる。

2) 今後の活動支援の展望

全国外大連合の取組みから実証された様々な教育成果をベースに、神田外語大学では新たに産官学連携によるグローバル人材育成に向けての取組みを進めている。

ひとつの事例として、2018年9月に地域貢献と人材育成を推進することを目的として、JR東日本グループと包括的連携に関する協定を締結した。これにより、本学の学生たちは、東京駅や成田空港駅等を中心とする外国人案内ボランティアにも積極的に参加している。駅周辺で、道に迷った外国人に学んだ外国語で話しかけるなど、現場でしか体験できない状況に臨機応変に対応する力を養う実践的な活動にもなっている。

スポーツのグローバル化は今後ますます加速するであろう。日本のスポーツと言語教育分野において、貴重な実践経験の場が確保され、この取り組みの教育的な意義やその効果が日本のグローバル社会で活躍する人材育成へ微力ながらつながっていくことを期待したい。



写真-1. 観客案内、誘導、出入統制区間での活動様子

参考文献

- 兵藤智佳（2019）『ボランティアで学生は変わるのか』早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編
- 河井亭（2012）ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか：全国大学生調査の分析から．国際ボランティア学会．ボランティア学研究 12: 91-102.
- 二宮雅也（2017）『スポーツボランティア 読本-「支えるスポーツ」の魅力とは？』悠光堂
- 迫明仁・上地雄一郎・山本力（1997）ボランティア活動に関する学生の意識と動向：ある大学での調査と認識構造の解析．岡山県立大学短期大学部研究紀要 4:13-26.
- 朴ジョンヨン（2011）国際スポーツイベントにおける通訳ボランティアの成果と課題 修士論文 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 2011 年 3 月
- 柴田和子・大東貢生・大山治彦ほか（2004）ボランティア活動の動機における自発性と外発性．龍谷大学国際文化研究所紀要．龍谷大学国際社会文化研究所 6:119-131.
- スポーツ庁（2018）平成 32 年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会特別措置法及び平成 31 年ラグビーワールドカップ大会特別措置法の一部を改正する法律による国民の祝日に関する法律の特例措置等を踏まえた対応について（通知）
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/hakusho/nc/1407708.htm（2021.8.19 閲覧）